

若い教師のために⑫

継続力

学力研常任委員 深沢 英雄

一、知的好奇心

「継続は力なり」、目標を達成したり、結果を出したりするために「続ける」重要性は多く説かれます。

教師には色々な研修会があります。学校内の研修、市町村内の研修、全国組織の様々な教科・教科外の研究会、民間の研究会もあります。インターネットで調べると本当にたくさんさんの研修会・研究会・講座が開催されています。

「面倒くさいな」「忙しいから」と考えて参加しないでいる先生と、「おもしろそうだから、行ってみようか」と足を運んでみる先生とでは、教師としての成長のチャンスは格段に違ってきます。「おもしろそう」「もっと知りたい」という好奇心のあるなしが、成長を分けます。好奇心のアンテナをいつ

も張っている先生は伸びていきます。

様々なことに好奇心を持って、様々な研修会・研究会に行っても、伸びる人と伸びない人がいます。「この会はこんなものか」「一回参加したら分かった」「この人とは二度と会わないから」とすぐに見切りをつける人は伸びていきません。

「自分が納得いくまでこだわる」「熱中する」「一度やりかけたことは、ある程度続けてみる」という粘り強さが成長を分けます。

二、「継続は「小さな問い」を立てるいつ

知的好奇心を持続し、粘り強くやり続けるには、何がいるのでしょうか。「根性だけ」では続きません。

カーネギーメロン大学のジョージ・ローウェン教授は、「好奇心が生まれるのは、知

識のすき間を発見した時だ」と言われる。知識のすき間は、小さい問いと言い換えることができます。

「小さい問い」ができれば、好奇心に導かれて「行動」したり、想定していた結果が得られることで、求めていた「小さい報酬」につながれば、また次の問いが生まれます。このきっかけ、行動、報酬、きっかけといういい回転が回ることで、継続と成長の習慣が生まれるのです。

私は、学力研（その当時は落ち研）に参加し最初に教えてもらったのが、音読の連れ読みでした。「**ん**」「**。**」で教師が切つて読み、その後子どもたちが復唱するというやり方です。子どもたちの声が大きくなり、間違いが少なくなってきました。でもその時、小さな問いが生まれました。教師が読んだあとに、子どもたちに読ませるとタイピングが悪く、そろわないことがあります。「どうしたらいいだろう。」

次の会で、先輩に聞いてみると「教師が読んだあとに、サンハイと言つと、頭がそろうよ。」と教えてもらいました。やつてみるとうまくいきました。

きつかけ↓行動↓報酬↓きつかけとうまく自分の教育実践が回りました。でも、いつもいつもうまくいくわけではありません。

三、新しい自分をつくる

「自信を失った。毎日がつらく、教師をやめたくなった。」と続けることができないという思いを持つ、若い先生もいると思います。

狭き門を突破し、あこがれの教師にはなったものの、日たらずして自信を失い、教職不適應をおこす教師がふえています。その多くの原因は、指導が入らずに子どもたちにならわれ、あげくのはてに、父母やまわりの教師たちの冷たい眼にさらされるためです。新任教師は、いろんな障害に突き当たります。子ども・職場の教師との人間関係・保護者との関係等々障害だらけです。大きな壁が若い先生の前に立ちはだかつています。

その都度、自分の力不足を嘆いてしまいます。中には、力不足を感じない、自信を持つている教師もいますが、力が足りないこととらえることができれば、教師の器とい

えます。しかし、自分の非力を嘆いているばかりでは、いくつもの障害は突き破れません。日本の教育の色々な矛盾が現場の教師の上を覆っています。若い先生には、この壁は見えない、見えにくいのです。自分がうまくいかないのは、そこと繋がっている考えることも一面必要です。

自分の指導が成立しないのは、自分の力不足と同時に、取り巻く条件の中で壁となり障害になっていると考えてみましょう。

四、自分を変え続けるかどうか

教育は基本的には、教師と子どもたちとの交流による人間形成です。それは、教師が子どもにわからせるウデを磨かなくては期待ができません。

「子どもが好き」「思いやりを持って接したい」と願っても、思いやりをどう行動化するか、分からせるかの確かな手順を身につけなくてはいけません。教師の仕事は、子どもをよりよく変えることです。

教師の仕事は、もともと難しいだからこそやりがいがあります。

理想は現実からほど遠く、理想と現実の狭間で迷います。それでも「みんな悩んで教師になる」のです。

子どもと共に生きる教育のできる学校に作りかえる努力を続ける。理想を失わず励んでいけば、やがて、それが実る日がやってきます。「小を重ねて大に迫る」ことです。

「日々のささやかな進歩」こそがやる気を引き出します。子どものちょっとした進歩が見えてくれば、自ずと自分が何をしなければならぬか。この子どもたちのどこをどう育てていかなければ、ならないのが分かってきます。小さな事からコツコツと継続しているとモチベーションの力が加わってきます。人は自分のやっていることにモチベーションが出て初めて実力以上の力を発揮出来ます。モチベーションをアップするには小さなことからコツコツと積み重ね、日々の小さな進歩を感じることが必要不可欠です。自分の小さい進歩を認めることです。子どもが変わり「進歩」した時に、教師自身が「進歩」しているのです。「継続のこつは、コツコツです。」